

報道関係者各位

2026年6月23日

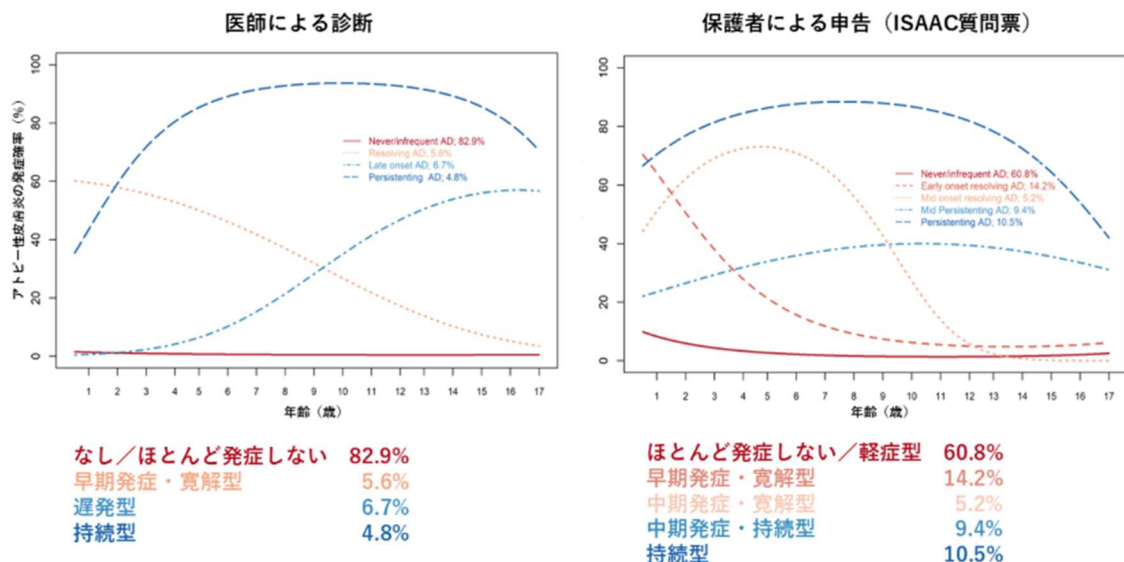
国立成育医療研究センター

**アトピー性皮膚炎には複数の経過パターンが存在  
 ～出生から17歳まで追跡した日本人コホートで、疾患の長期経過と  
 IgE感作パターンの多様性が明らかに～**

国立成育医療研究センター（所在地：東京都世田谷区大蔵、理事長：五十嵐隆）アレルギーセンターの山本貴和子、福家辰樹を中心とする研究グループは、同施設で2003年から一般の小児を対象として行ってきた出生コホート<sup>1</sup>（成育コホート研究）を用い、アトピー性皮膚炎の長期的な経過とIgE感作<sup>2</sup>およびアレルギー症状の推移を、出生から17歳まで解析しました。

そして、補足解析では医師診断と保護者申告の両方を比較することで、アトピー性皮膚炎の経過パターンの分類数や内容が評価方法によって異なること（4パターン、5パターン）、さらに経過パターンに応じてIgE感作や合併症の経過に違いがあることが明らかになりました。本研究は、アトピー性皮膚炎の多様性とその免疫学的背景を長期的に明らかにした、アジアでも稀な研究です。

本成果は、英国アレルギー学会誌『Clinical & Experimental Allergy』に掲載されました。



【図1：アトピー性皮膚炎の経過パターン比較】

<sup>1</sup> 出生コホート：妊娠中から子どもを長期的に追跡調査し、生活環境や化学物質などの要因が子どもの成長や健康にどのような影響を与えるかを解明する手法のこと。

<sup>2</sup> IgE感作：アレルギーの原因となる物質（アレルゲン）が体内に入った際、それに対抗するための「特異的IgE抗体」が体内で作られ、免疫細胞に結合してアレルギー反応を起こす準備が整った状態のこと。

## 【プレスリリースのポイント】

- 医師診断によるアトピー性皮膚炎は、出生から思春期までに 4 種の経過パターンに分類されました。
- 医師診断と保護者申告では異なる経過パターンが検出され、医師診断では 4 パターン、保護者申告では 5 パターンと分類数や内容が異なり、さらに IgE 感作やアレルギー症状（喘息・アレルギー性鼻炎など）との関連がわかりました。
- IgE 感作には年齢による特徴的な変化がみられ、食物 IgE は幼児期から高く、吸入 IgE は年齢とともに増加していました。
- アトピー性皮膚炎の経過パターンによって、喘息・アレルギー性鼻炎などの併存するアレルギー疾患の推移が異なり、特に持続型では強いアレルギー体質（高い IgE 感作・併存するアレルギー疾患の多さ）が認められました。

## 【背景・目的】

アトピー性皮膚炎は、発症時期や重症度、持続性が患者さんごとに大きく異なる疾患です。近年では、臨床症状に加えて免疫学的特徴に基づく「エンドタイプ<sup>3</sup>」の概念が注目されています。

また、アトピー性皮膚炎の臨床像や IgE 感作パターンは人種や地域によって異なることが知られていますが、日本を含むアジア人集団において、出生から思春期まで長期間にわたり前向きに追跡した研究は極めて限られていました。

## 【研究手法と結果】

本研究では、成育コホート（T-CHILD Study）に参加した出生コホートを対象に、出生から 17 歳まで前向きに追跡しました。

- 妊娠 16 週未満に母親を登録（2003-2005 年）
- 17 歳まで医師診断と保護者申告によるアトピー性皮膚炎を繰り返し評価
- 5、9、13、17 歳時に約 100 種類以上の IgE 抗体価（ISAC）を測定
- 潜在クラス成長分析（LCGA）によりアトピー性皮膚炎の長期的経過パターンを特定

### 1) アトピー性皮膚炎には複数の経過パターンが存在

- 医師診断：4 パターン
- 保護者申告：5 パターン

→ 評価方法により分類数や内容が異なることが判明

### 2) IgE 感作の年齢別パターン

- 食物 IgE<sup>4</sup>：幼児期から高い
- 吸入 IgE<sup>5</sup>：年齢とともに増加

<sup>3</sup> エンドタイプ：疾患の背後にある体内での原因メカニズムごとの分類のこと。

<sup>4</sup> 食物 IgE：特定の食べ物（アレルゲン）に体が反応して作るアレルギー抗体のこと。

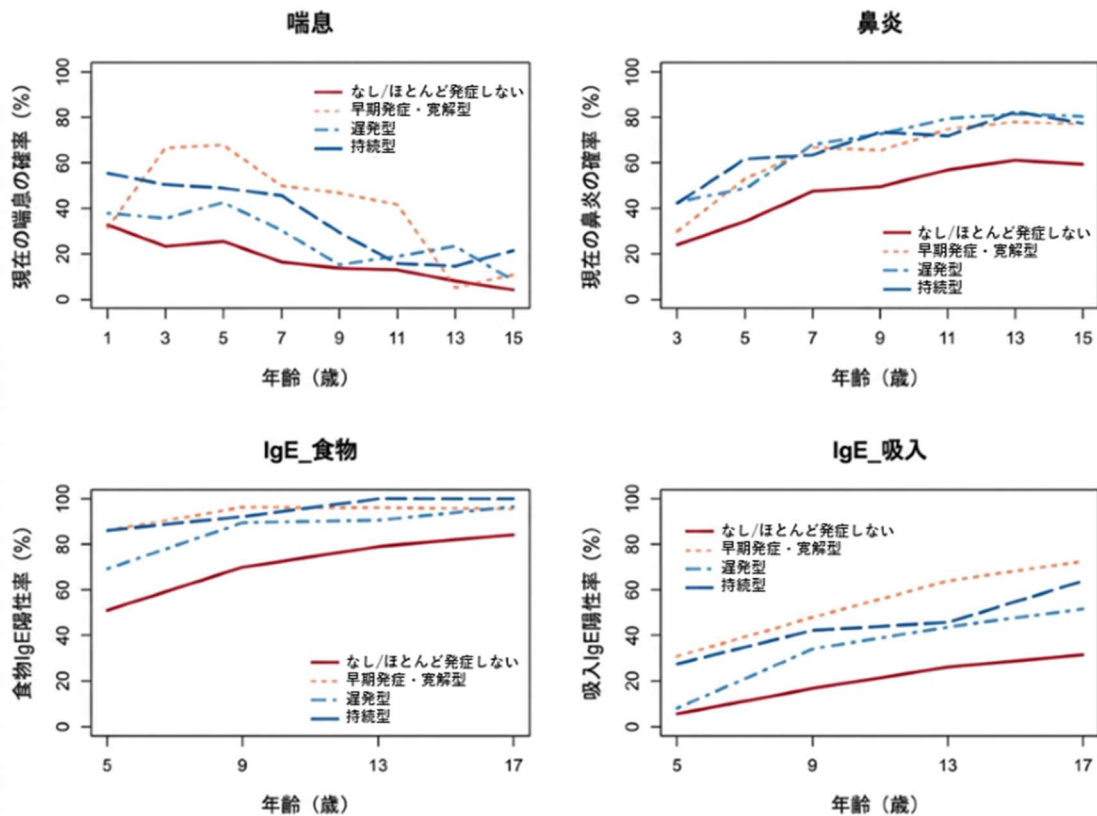
<sup>5</sup> 吸入 IgE：花粉やハウスダストなど空気中の物質に対して作られるアレルギー抗体のこと。

3) 持続型アトピー性皮膚炎は最も強いアレルギー体質と関連

- 持続型アトピー性皮膚炎では
  - ・喘息・アレルギー性鼻炎の合併が最多
  - ・食物 IgE 感作は高い水準で推移
  - ・吸入 IgE 感作も最も高値

4) 家族歴が最大のリスク因子

- 親にアトピー性皮膚炎がある場合、すべてのタイプでリスク上昇
- 特に持続型アトピー性皮膚炎では最も上昇



【図 2：併存するアレルギー疾患、IgE 陽性率の割合】

【今後の展望】

本研究により、アトピー性皮膚炎が単一の疾患ではなく、長期的に異なる経過と免疫学的特徴を持つ複数の経過パターンから構成されることが明らかとなりました。

また、本研究で示されたように、医師診断と保護者申告が異なることが明らかになりました。軽症例は医療機関を受診せず、診断を受けていない可能性や、受診していてもアトピー性皮膚炎と診断されていない可能性が示唆されました。

さらに、食物抗原と吸入抗原に対する IgE 感作の時間的変化を踏まえた介入戦略の構築により、アトピー性皮膚炎の重症化予防やアレルギー疾患の進展（アレルギーマーチ）の抑制への応用が期待されます。

## 【発表論文情報】

題名 : Unraveling the Natural History of Atopic Dermatitis: Prospective Disease Trajectories and Longitudinal IgE Sensitization from Birth to Adolescence

著者 : 山本 貴和子 (責任著者)<sup>1,2</sup>、羊利敏<sup>2</sup>、平井 聖子<sup>1</sup>、豊國 賢治<sup>1</sup>、福家 辰樹<sup>1</sup>、大矢 幸弘<sup>3,4</sup>

所属名 :

- 1) 国立成育医療研究センター アレルギーセンター
- 2) 国立成育医療研究センター エコチル調査研究部
- 3) 名古屋市立大学大学院医学研究科環境労働衛生学
- 4) 藤田医科大学ばんだね病院総合アレルギー科

掲載誌 : The Clinical & Experimental Allergy

DOI: <https://doi.org/10.1111/cea.70325>

## 【問い合わせ先】

国立成育医療研究センター 企画戦略局 広報企画室 神田・村上  
電話 : 03-3416-0181 (代表) E-mail:koho@ncchd.go.jp